日本・ポーランド国際共同企画公演

新作能

鎮魂

―アウシュヴィッツ・フクシマの能

観世銕之丞

作 ヤドヴィガ・ロドヴィッチ　演出 笠井賢一

能

清経

観世銕之丞

世阿弥作

2016年11月14日(月)　午後6時半　国立能楽堂

新作能「鎮魂」（2016年11月14日、国立能楽堂）プログラム

鎮魂としての能

能という芸能は社会問題・事件性を扱うことが主眼ではなく、不慮の死で想いを残して亡くなった人々の魂を慰撫し、鎮魂することが主眼なのです。その意味で愛する人を亡くした悲しみや想いは世界共通だと思いますし、それを表現できるのが能という芸能の力なのだと思います。

また作者のヤドヴィガさんにとってアウシュヴィッツで政治犯として亡くなった叔父さんへの想いと、大使在任当時に津波で亡くなった方々の肉親、あるいは原発事故で故郷を失った人々の痛みとは重なりあっています。その二つの想いを両陛下の和歌の心によって繋ぐ構成になっています。

能の表現は枝葉を取り払って魂の慰撫に集中していくものです。アウシュヴィッツの教会の奉納はやはり緊張しましたが、この能の一番の眼目である「再生と昇天の舞」を中心に、深い祈りそのものになるような舞が舞えればと思い、舞いました。

人間の悲しみを慰撫するという行為は洋の東西を問わないのですから、能の演技が普遍的かつ深いものになり、声や立ち姿、歩む姿の中に祈りが込められるならば、日本とヨーロッパの宗教観の違いを超え、必ずその想いは伝わると思っています。

観世銕之丞

作者として

私が書きました新作能『鎮魂』はアウシュヴィッツとフクシマを主題にしています。人災である戦争と自然災害では勿論それぞれ違いがあります。しかしそれによって愛する人を失い、決して埋められない深い悲しみ、癒しえない傷を受けることは同じです。その悲しみ、傷をどうやって乗り越え、生き継いでいくことができるのでしょうか。また想いを残したまま殺されたり、死んでしまった人への感謝をどう伝えることができるのでしょうか。残された人にできることは戦争や災害が起きないように努力することに加え、何よりその大切な人のことを想い出し、涙し、祈ることでしょう。そのことによって残された人も人生を改め、悲しみを越えて生き継ぐことができるのです。

私が能を学び、能を書くのも、世界の演劇の中でも能がそのことを歌と舞によって最も優れた形で表現できるからです。二〇一二年の歌会始めでの両陛下の和歌にはそうした想いが深く刻みつけられています。まさしく「鎮魂」にふさわしい和歌であり、それでこの能に入れさせていただいたのです。

世界にさまざまな形で存在する皇室のなかでも、歴史的な出来事や災害を、このように和歌という凝縮された詩によって、これだけ深い祈りとして表現できることは類を見ない素晴らしいことです。

ヤドヴィガ・M・ロドヴィッチ＝チェホフスカ

©銕仙会 のご許可を得て公開しています。北海道ポーランド文化協会

演出家の記

十一月一日、新作能『鎮魂』はアウシュヴィッツの聖ユゼフ平和教会で奉納上演されました。それがこのたびの一連の公演の最初でした。十一月一日はヨーロッパでは死者の日であり、墓参の日であり休日です。これは世界中で執り行われる冬至の祭りに根を持っています。冬至とは太陽がもっとも衰弱し、再生をはじめる分岐点です。ケルト文化に根を持つハロウィンでも、中国でも冬至が一年の始まりであり生と死が入れ変わり、再生の始まりの日なのです。

日本出発前日の十月三十日に先代観世銕之亜師の十七回忌追善能が催され、観世淳夫さんが『道成寺』を披き、銕之丞師が『三輪 白式神神楽』を上演しました。『三輪』はアマテラスオオミカミとアメノウズメの天岩戸隠を再現します。これは衰弱した太陽がアメノウズメの芸能の力で再生を果たす物語であり、冬至の祭りの原点です。その十一月一日に新作能『鎮魂』の「再生と昇天の舞」が鎮魂のためにアウシュヴィッツの教会で奉納されたのです。このアウシュヴィッツの犠牲者を弔うために作られた教会の祭壇画には倒れ臥した囚人たちが再生し、鳥たちと一緒に昇天していく様が描かれています。それを背景に舞われたのです。

この新作能『鎮魂』は、前作『調律師―ショパンの能』のための打ち合わせでポーランドを訪れた六年前に発案され、長い年月をかけて育まれ、能本もたびたび書き直されました。そしてアウシュヴィッツでの奉納公演とブロツワフでのシアター・オリンピックスでの上演を経て、本日の国立能楽堂での上演を迎えました。

それは能という芸能の根源を考えることでもありました。鎮魂としての能の力が、和歌の力とあいまって世界の人々の魂を揺り動かす表現になることを目指してきました。何よりも東日本大震災の翌年の天皇皇后両陛下の御詠「津波来し時の岸辺は如何なりしと見下ろす海は青く静まる」と「帰り来るを立ちて待てるに季のなく岸とふ文字を歳時記に見ず」の和歌の力がアウシュヴィッツと福島を繋いでくれています。万葉集以来、和歌が生きとし生けるものの命を慈しみ癒すという伝統の上に立ち、両陛下が新しい時代の象徴天皇制のなかで努められた数々の慰霊の行動と、培われてきたお人柄が余すことなく表現された鎮魂の和歌です。両陛下にこの度の公演をご覧頂けるのは有難く喜ばしいことです。

演出家として今回の作品で地謡(コロス)―葬られざる人々の霊(遺骨)を一つの役として動かすようにしました。これは観世寿夫さんがかつて『鷹姫』で先鞭をつけたことです。私はそれを引き継ぎ、石牟礼道子作『不知火』や、ホメロスの原作により私が能本を書いた『冥府行』でも試みてきました。これも新作能の一つのあり方として意味を持つと思っています。

長い上演に至る経緯の中で、多くの公的、私的な様々なご支援を受けてこのたびの公演に至りました。深く感謝します。多くの出演者の皆さん、日本ポーランド両国のスタッフの皆さん、そして観客の皆さんに支えられています。この能をさらには福島をはじめ東北でも上演をしてゆきたいと切に願っています。ありがとうございました。

能楽プロデューサー・演出家　笠井賢一

能

清経

都落ちを余儀なくされた平家一門。なかにも平家の嫡流重盛の三男清経は前途に絶望し、九州豊前国柳ケ浦で入水して果てた。

清経の家臣淡津三郎が形見の黒髪を持ち、都に残る清経の妻を訪ねる。

妻は生死をともにと誓い合ったのに、病死ならばともかくも、自ら死を選んだことを恨み哀しむ。形見の黒髪も見るほどに辛く、宇佐八幡に手向け返し、せめて夢になりとも面影を見たいと涙ながらに床に着く。

妻の夢の中に清経が現れ、しずかに語りかける。互いに恋しさゆえに行き違ってしまった思いを、恨みかこちあう二人。やがて清経は都落ちのあとの様々な出来事を語る。落ちのびた九州も追い落とされ、頼みの宇佐八幡の神託にも見捨てられ、望みを失う。

保元の頃は花と栄えた一門が、寿永の頃には都落ちし、秋の紅葉のように散り散りに浮かび漂う儚さ。清経はこのまま憂き目を見るよりはと思い切り、横笛を吹き鳴らし、朗詠をし、念仏ののち入水した。死して後は修羅道の苦患に苛まれると訴えるが、死に臨んでの念仏の功徳で成仏したと消え失せる。

世阿弥作の修羅能の名作。戦で引き裂かれた男女の心の襞を描き切った。

休憩と解説

作者　ヤドヴィガ・ロドヴィッチ
聞手　笠井　賢一

シテ　平清経　観世銕之丞
ツレ　清経ノ妻　谷本　健吾
ワキ　淡津三郎　森　常太郎
笛　藤田六郎兵衛
小鼓　大倉源次郎
大鼓　原岡　一之
地謡　西村　高夫
柴田　稔
馬野　正基
北浪　貴裕
長山　桂三
安藤　貴康
後見　鵜澤　光
観世　淳夫

©銕仙会 のご許可を得て公開しています。北海道ポーランド文化協会

新作能

鎮魂

―アウシュヴィッツ・フクシマの能

東日本大震災の津波で息子と家を失い、原発事故で故郷をも失った福島から来た男がアウシュヴィッツを訪ねる。アウシュヴィッツの公式ガイドの日本人が案内をする。その二人の前に庭掃きの老人が現れ、大地をくしけずり骨を拾い、箱に納め、話しかける。政治犯として獄死したアチュウ青年が拷問のすえ、六一六一七番として、この地の数え切れぬ死者に先駆けて昇天したと語り、戦争にとられていた父が帰還したのは、アチュウ青年が空の棺のまま葬られて五年も経ってからだったという。福島の男も津波に見舞われ、原発事故が起きて故郷と息子を失ったことを語り「息子よ！」と呼びかける。庭掃きの老人は「父よ！」と言い残して消える。（中入）

案内人は、負の遺産とも言われるこの地は「歴史と真実の出会いの場」であり、それは二度と同じ過ちを繰り返さないための「記憶の場」でもある。同じ人類の負の遺産である広島、長崎の原爆、そして福島の原発事故と向き合う日本人である自分がここで案内人をしているのもそのためであり、我々もここから現代に向き合わなければならないのだと言う。さらに庭掃きの老人が常に語るアチュウ青年についても物語る。

やがて在りし日のアチュウ青年が胸にミルテ（銀梅花）の胸飾りをつけて現れ、「清めの涙よ、もっと流れよ」と再生と昇天の舞を舞い、世界を緑の庭と讃えて天に昇っていく。

二〇一六年、日本とポーランドで共同制作・上演された新作能『調律師―ショパンの能』の演出家笠井賢一の発案により始まったこの新作能は、二十世紀の負の遺産アウシュヴィッツの悲劇の鎮魂を主題に、同年三月の大震災を目の当りにした能本作者ヤドヴィガ・ロドヴィッチ駐日ポーランド大使（当時）が創作した。さらに二〇二一年の歌会始にポーランド大使として招かれ、両陛下の詠まれた津波への鎮魂の和歌「津波来し時の岸辺は如何なりしと見下ろす海は青く静まる」（天皇陛下）と「帰り来るを立ちて待てるに季のなく岸とふ文字を歳時記に見ず」（皇后陛下）に感動して二つの和歌を能の詞章に取り入れて完成させた。日本とポーランドの長い文化交流の成果といえる作品。

前シテ　熊手を持つ老人
後シテ　アチュウの霊　観世銕之丞

ツレ　福島から来た日本人　西村　高夫

アイ　アウシュヴィッツ強制収容所博物館の日本語案内人　深田　博治

地謡　葬られざる人々の霊（遺骨）　柴田　稔
馬野　正基
北浪　貴裕
長山　桂三
谷本　健吾
安藤　貴康

笛　藤田六郎兵衛
小鼓　大倉源次郎
大鼓　原岡　一之
太鼓　小寺眞佐人

後見　鵜澤　光
観世　淳夫

作　ヤドヴィガ・ロドヴィッチ
間語り補綴　笠井　賢一
節付・作舞　観世銕之丞
演出　笠井　賢一

能

清経

ワキ　八重の汐路の浦の波、八重の汐路の浦波、九重にいざや帰らん。

ワキ　これは左中将清経の御内に仕へ申す、淡津の三郎と申す者にて候、さても頼み奉り候清経は、終に御身のなり行くべき事を思し召し定められけるか、豊前の国柳が浦の沖にして、御身を投げ空しくなり給ひて候、その後船中を見奉れば、肌の御守りに、鬢の髪を残し置かれて候ほどに、あへなき御形見を持ち、只今都へ上り候

ワキ　急ぎ候ほどに、これははや都に着きて候

ワキ　まづまづ案内を申さうずるにて候、いかに誰か御入り候、筑紫より淡津の三郎が参りたる由、それそれ御申し候へ

ツレ　なに淡津の三郎と申すか、人までもなしこなたへ来たり候へ

ワキ　や、これは御声にてありげに候、淡津の三郎が参りて候

ツレ　さて只今は何のための御使にてあるぞ

ワキ　かくと申さんため是までは参りて候へども、何と申し上ぐべきやらん、是非を弁へず候

ワキ　ただ面目もなき御使にて候

ツレ　面目もなき御使とは、もし御遁世にてあるか

ワキ　いや御遁世もなく候

ツレ　過ぎにし筑紫の戦にも御恙なきとこそ聞きつるに

ワキ　さん候合戦にも討たれ給はず候ひしが、筑紫へは叶ひ給はず、都へはとても帰らぬ道芝の、雑兵の手にかからんよりはと思し召し定められけるか、豊前の国柳が浦の沖にして、更け行く月の夜舟より、御身を投げ空しくなり給ひて候

ツレ　なに身を投げ空しくなり給ひたるとや

ツレ　怨めしやせめては討たれもしはまた、病の床の露とも消えなば、力なしとも思ふべきに、われと身を投げ給ふこと、偽りなりつる約言かな、げに怨みてもそのかひの、なき世となるこそ悲しけれ

地謡　何事もはかなかりける世の中の。

ワキ　御身を投げ給ひて後船中を見奉れば、肌の御守りに、鬢の髪を残し置かれて候ほどに、これまで持ちて参りて候

ツレ　これは中将殿の黒髪かや、見れば目も眩れ心消え、なほも思ひの増さるぞや、見るたびに心づくしの髪なれば、うさにぞ返す本の社にと

地謡　手向け返して夜もすがら、涙と共に思ひ寝の、夢になりとも見え給へと、寝られぬに傾くる、枕や恋を知らすらん、枕や恋を知らすらん。

シテ　うたた寝に、恋しき人を見てしより、夢てふものは、頼み初めてき。

ツレ　いかに古人、清経こそ参りて候へ

シテ　不思議やなまどろむ枕に見え給ふは、げに清経にてましませども、まさしく身を投げ給へるが、夢ならで如何見ゆべきぞ、よし夢なりとも御姿を、見みえ給ふぞありがたき、さながら命を待たでわれと身を、捨てさせ給ふ御事は、偽りなりける約言なれば、ただ怨めしう候

シテ　さやうに人をも怨み給はば、われも怨みは有明の、見よとて贈りし形見をば、何しに返させ給ふらん

ツレ　いやとよ形見を返すとは、思ひあまりし言の葉の、見る度に心づくしの髪なれば

シテ　うさにぞ返す本の社にと、さしも贈りし黒髪を、飽かずは留むべき形見ぞかし

ツレ　おろかと心得給へるや、慰めとての形

©銕仙会 のご許可を得て公開しています。北海道ポーランド文化協会

見なれども、見れば思ひの乱れ髪
シテ　分きて贈りしかひもなく、形見を返すはこなたの怨み
ツレ　われは捨てにし命の怨み
シテ　互ひに託ち
ツレ　託たるる
シテ　形見ぞつらき
ツレ　黒髪の
地謠　怨みをさへに言ひ添へて、怨みをさへに言ひ添へて、くねる涙の手枕を、並べて二人が逢ふ夜なれど、怨むれば独り寝の、ふしぶしなるぞ悲しき。げにや形見こそ、なかなか憂けれこれなくは、忘るる事もありなんと、思ふも濡らす袂かな、思ふも濡らす袂かな。
シテ　いにしへの事ども語つて聞かせ申し候べし、今は怨みを御晴れ候へ
地謠　そもそも宇佐八幡に参籠し、様々祈誓怠らず、数の頼みをかけまくも、忝なくも御戸帳の、錦の内よりあらたなる、御声を出して斯くばかり
シテ　世の中の、うさには神もなきものを、なに祈るらん、心づくしに
地謠　さりともと、思ふ心も、虫の音も、弱り果てぬる、秋の暮れかな。
シテ　さては仏神三宝も
地謠　捨て果て給ふと心細くて、一門は、気を失ひ力を落として、足弱車のすごすごと、還幸なし奉る、哀れなりし有様。
地謠　かかりける処に、長門の国へも敵向かふと聞きしかば、また船に取り乗りて、何処ともなく押し出す、心のうちぞ哀れなる、げにや世の中の、移る夢こそまことなれ、保元の春の花、寿永の秋の紅葉とて、散り散りになり浮かむ、一葉の舟なれや、柳が浦の秋風の、追手顔なる後の波、白鷺の群れ居る松見れば、源氏の旗を靡かす多勢かと肝を消す。ここに清経は、心に籠めて思ふやう、さるにても八幡の、御託宣あらたに心魂に残ることわり、まこと正直の、頭に宿り給ふかと、ただ一筋に思ひ取り。
シテ　あぢきなや、とても消ゆべき露の身を、
地謠　なほ置き顔に浮き草の、波に誘はれ、舟に漂ひていつまでか、憂き目を水鳥の、沈み果てんと思ひ切り、人には言はで岩代の、待つことありや暁の、月に嘯く気色にて、舟の舳板に立ち上がり、腰より横笛抜き出し、音もすみやかに吹き鳴らし、今様を謠ひ朗詠し、来し方行く末をかがみて、終にはいつか徒波の、帰らぬはいにしへ、とまらぬは心づくしよ、この世とても旅ぞかし、あら思ひ残さずやと、よそ目にはひたふる、狂人と人や見るらん、よし人は何とも、みるめをかりの夜の空、西に傾く月を見れば、いざや我も連れんと、南無阿弥陀仏弥陀如来、迎へさせ給へと、ただ一声を最期にて、舟よりかつぱと落ち汐の、底の水屑と沈み行く、憂き身の果てぞ悲しき。
ツレ　聞くに心もくれはとり、浮き寝に沈む涙の雨の、怨めしかりける契りかな。
シテ　言ふならく、奈落も同じ泡沫の、あはれは誰も、変はらざりけり。
地謠　さて修羅道に、遠近の、たづきは敵雨は矢先、土は精剣山は鉄城、雲の旗手を衝いて驕慢の剣を揃へ、邪見の眼の光、愛欲貪恚痴通玄道場、無明も法性も乱るる敵、打つは波、引くは潮、西海四海の因果を見せて、これまでなりや、まことは最期の十念乱れぬ御法の舟に、頼みしままに疑ひもなく、げにも心は清経が、げにも心は清経が、仏果を得しこそありがたけれ。

◎演出の都合上、詞章に変更がある場合がございます。

新作能

鎮魂

アウシュヴィッツ・フクシマの能

ツレ　恐ろしい光景です　あの山と積まれた髪の毛　履物　眼鏡

アイ　ご気分を悪くされたのも当然です　ここで休まれるといいでしょう

ツレ　一体私に何が理解できたのか

アイ　理解し難いことです

ツレ　あの写真　剃られた頭　囚人服　そしてあれらの眼

アイ　多くを物語り　私たちに訴えかけ考えさせる眼です

ツレ　見覚えのあるような…

アイ　お国は

ツレ　福島です　今　家は汚染地域として立ち入りできません　あなたはここにお住まいですか

アイ　ええ二十年前から…　福島…　恐ろしいことでした　津波　原子力発電所の事故　この地にいても心を痛めています

ツレ　思い起こしても仕方のないこと　私の息子は津波で亡くなり　未だ遺体も見つからず　汚染のため町中が避難し　私も妻も家を離れ　妻は去年亡くなり　もう私の家族は誰もいない

地謡　春はきよらか　春は緑　春はきよらか　春は緑　春はきよらか　春は緑　春はきよらか　春は緑

シテ　人は何のため　此処に来る

ツレ　あの人は一体誰です

アイ　彼はここの掃除人です　どうぞお気になさらないで下さい

ツレ　息子を津波で亡くした巡礼者だと伝えてください

シテ　何と

アイ　息子を津波で亡くし　未だ遺体は見つかっていないと

シテ　私は遺骨を集めて整理をしている者　私は墓堀人にして庭師　かつては番号六一六一七番

地謡　原の真砂　沙漠の骨たる　我らを数ふる者のあるや　我らを記憶する者ありや　帰り来るを　立ちて待てるに　季のなく　岸とふ文字を　歳時記に見ず※1

シテ　灰を梳るのは至難の業だが　時に大地から紛れなき宝物　骨と頭蓋の一部が手に入る

ツレ　なぜそんなことを？

シテ　ここでも葬られざる者の遺骨が出てくる　私はそれを探し　この箱に納める　骨という骨は　それ一個が世界の雛型　丁重に扱わねばならぬ

ツレ　どれだけの遺体を見たことか　息子の形見さえ見つからぬ

地謡　主の手我に臨み　谷の中に　我を置き給ふ　谷間には骨充てり　骨甚だ　多くありて　皆既に枯れたり　彼　我に言ひ給ひけるは　人の子よ　是等の骨は生くるや　汝是等の骨に預言して言ふべし

シテ　「枯れたる骨よ声を聴け※2」と

ツレ　お、　枯れた骨が立ち上がる　枯れた骨がいかに生き返る

シテ　動く　動く

地謡　お、　我等あはれなる骨　餓ゑたる骨　打ち棄てられたる骨　我等渇きたる骨　人の声をば　涙をば待つ骨なり

シテ　我は若き番号　かつてはヤンという名もあった　家族からは「アチュウ」と呼ばれ　アウシュヴィッツの一九号棟で六一六一七番として死んでいった者　その後の数え切れぬ死者に先駆け　私は数字の活字のように小さくなり　他の者たちとともに列をなし　一筋の煙に縋る蟻のように　そのまま天に昇った

ツレ　死神は突如木立の裂ける轟きとともに来た　その残忍な眼が　津波の波頭に覗き　三月十一日　寒い午後「父さん間に合わないかも…」気仙沼に住む息子の声が受話器から聞こえ　電話は

©銕仙会 のご許可を得て公開しています。北海道ポーランド文化協会

途切れた

シテ　十九歳の時　私は連行された　三月の間打擲され　腎臓を傷めつけられ　血を吐いた　スープが飲みたいと貰いそれを飲んで静かに死んだ

ツレ　津波の警報を聞き　真っ先に家族のことを思ったが　息子の電話の方が早かった「早く逃げろ！」――受話器に向かって怒鳴った

シテ　時が止まり　それが永遠に続くと思われる瞬間がある　母は教会にいて　耳も口も不自由な叔母が訃報を受けた六一六一七番　ヤン・プォンカ死亡　母はそれを読み苦悩のあまり倒れた　戦争にとられていた父は　私が葬られた五年後に帰ってきた

ツレ　息子よ　お前は何処にいる

シテ　父よ！　父よ　〈中入〉

アイ　案内を終えると、私はいつも日本人がこの博物館で働きながら、これが何の役に立つかと自らに問いかけるのです。ポーランドに住んではや二十年。此処アウシュヴィッツで五万人の日本人を案内した。この記憶の場と呼ばれるアウシュヴィッツ博物館は、歴史の真実との出会いの場。合法的に選ばれた政権が、戦争に突き進み、いつの間にか数知れぬ殺戮を重ねることの恐ろしさ！　誰に責任があるのかと自問せざるを得ない。日本人は誰一人犠牲になっていない。しかし当時日本はドイツと同盟国でもあった。この人類の負の遺産をいかに受けとめればいいのか。あなたは津波で失った息子を悼んでいる。放射能汚染で福島の故郷も失われた。フクシマとナガサキ、ヒロシマ。原発と兵器との違いはあっても、放射能による被害ということからすれば、同じ人類の負の遺産なのです。アウシュヴィッツと同じように記憶され、何故と問い、立ち止まり、そこから現代についても考えなければならないのです。私がここで案内をするのもその為なのです。あなたは狂った掃除の老人に捕まって、息子のことを思い出された。此処には限りない死者の影がある。此処では多くの見学者が死者の声を聞き、狂気に見舞われる。アウシュヴィッツの記憶は私たちの内部に汚染のように残留するのか？　先程の老人は見知らぬ人を捕まえては、「母さん、姉さん、父さん」と呼びかけたりするのです。害はないのですが、彼がいつも繰言のように話すのは、自分はドンブルフカ出身のシレジア者で、ピエカーリの町長の子だというのです。一九四二年のこと、運動場でポーランドの歌を歌っているところを人に聞かれ、それをドイツ人に密告された と。四人兄弟のうちのただ一人の男子で、五月二十一日、ゲシュタポの取り調べに拉致されたきり二度と戻らず、牢獄で三ヶ月にわたり拷問を受け、ここへ移された時には既に衰弱し、何も食べずにひたすら苦しみ、藁床で血を吐き、結局死んだのはその年の十月十五日、朝の九時半だったと。遺体は家に帰らず、遺族の許に届いた文書には、ドイツ帝国に対する反逆罪を犯した、とあった――そういつも言うのです。彼は自らの葬儀についても語ります。棺桶はからっぽだった。棺の上に銀梅花の輪飾りが飾ってあったが、それは妹のリリが載せたものだと。シレジアの地方では、その昔さまざまな儀式に銀梅花を用いました。銀梅花は光沢のある、深緑の細かな葉をもち、白く小さな花で、銀色に輝く美しい蘂があり、芳香を放つ、純潔と祝福を象徴するこの植物、今では育てる者も無くなったと聞きます。彼を愛した父親が徴兵されていた戦争から帰ってきたのはその葬儀の五年後のこと。父に会えずに死んだというポーランド人と、息子を失った日本人がこの記憶の場で出会ったのです。

シテ　今日は私のもっとも大事な最後の日
そして始まりの日　私は別の世界に参ります　掻き乱された藁の床こそ永遠のわが玉座　自らの血の天鵞絨の上に輝くは　餓え細りたるわが身体　いざ軽々と天使のように天をめがけ　新しき家に向かう　我が父に見えんと！

地謡　Arbeit macht frei ※3「働けば人は自由を得る」されど人力を超えた労働　苦痛と究極の飢えが人を自由にするものか？　我ら迷へる骨　天にても我らを忘れぬや？

ツレ　息子よ　お前は成人式を迎えたばかりだった

シテ　息子を思って泣いているのか　私のため戦争で殺された者たち　火に焼かれた者たち　森や収容所で　凍え死んだ者たちのため　海に棄てられた亡骸たちのために泣け　長く　長く　熱き涙もて泣け　非業の死を遂げた者たちのありとある骨を呼び集めよ

地謡　とこしへの河床の　石の如くに数おほき
我らは白き骨なり　銀漢の星の如くに
数おほき　我ら　白き骨は　天の闇にて
声も上げずに待ち設く

シテ　我は人を待ち設く

地謡　帰り来るを　立ちて待てるに　季のなく
岸とふ文字を　歳時記に見ず

ツレ　息子よ　聞こえるか　ここへ　私の許へ

シテ　私を呼ぶ声がする　風の音が聞こえる
大地の上を渡る風は大地の息　波濤の下に漲る海の音　父よ　私は粗末な死の寝床から身を起こし　草原や林や古い獄舎を見下ろしつつ、天をめがけて飛ぶ　おお　世界は緑の庭

ツレ　息子よ　お前の亡骸を葬ってやりたかった

シテ　涙よ！　清めの涙よ　もっともっと流れよ！　すべてを清め尽くすまで

〈再生と昇天の早舞〉

シテ　我が身は木々や虫たち　魚たちの餌となる　我は自由なり！

地謡　風に乱れし塵の昇りて　雲居にて雨と
混ぢり　黒き涙の飛ぶ　かさここそと
またぎしぎしと　骨は骨と接ぎ接がれ
塊を成し　結ぼれ　やがて苔の肌
草の髪　生ける腱と筋とに蔽はるる

シテ・ツレ　津波来し

地謡　津波来し

シテ・ツレ　時の岸辺は如何なりしと

地謡　如何なりしと

ツレ　見下ろす海は青く静まる

地謡　青く静まる※4

ツレ　ひとときの間　ここが我が家の庭になったかのように思えました

アイ　暗くなってきました　もう行きましょう

ツレ　あの掃除人はどこへ消えたのだろう
息子の姿を見たような

アイ　ここはそういう不思議なことが起こる場所です

ツレ　故郷へ帰りたくなりました

◎演出の都合上、詞章に変更がある場合がございます。

※1《帰り来るを　立ちて待てるに　季のなく　岸とふ文字を　歳時記に見ず》
平成二十四年一月十二日の歌会始において披講された皇后陛下御歌。この年の歌会始の御題は、平成二十三年頭に「岸」と定められたもの。この御歌において皇后陛下は、様々な海岸に佇んで、四季を分かたず近親者の帰還を待ち侘びる人々に思いを寄せられている。そこには、三月の大津波で家族を失った人々のみならず、シベリア抑留から帰った人々、また遂に彼の地に留まった人々も含まれる。岸のある処、必ず待つ人々がいる（宮内庁公式ホームページ掲載の説明に基づく解釈）。

※2《主の手　我に臨み　谷の中に我を置き給ふ　谷間には骨充てり　骨甚だ多くありて　皆既に枯れたり　彼　我に言ひ給ひけるは　人の子よ　是等の骨は生くるや　汝是等の骨に預言して言ふべし　「枯れたる骨よ　声を聴け」と》『旧約聖書』エゼキエル書三七節に基づく。

※3《Arbeit macht frei》
「人は労働によって自由になる」という決まり文句。ナチスはこれをスローガンとして強制収容所などに掲げた。

※4《津波来し　時の岸辺は　如何なりしと　見下ろす海は青く静まる》
平成二十四年一月十二日歌会始において披講された天皇陛下御製。被災した人々の激励のために天皇皇后両陛下は東北地方を訪ねられたが、御製はそのことを基に作られた。天皇陛下は五月六日、釜石から宮古までヘリコプターで飛行されたが、その際ご覧になられたことが詠みこまれている。（宮内庁公式ホームページによる）

©銕仙会 のご許可を得て公開しています。北海道ポーランド文化協会

新作能『鎮魂』ポーランド・日本公演スケジュール

2016年

10月31日(月)　日本発
クラクフにて在ポーランド日本国大使松富重夫氏主催
レセプション

11月1日(火)　アウシュヴィッツにてアウシュヴィッツ・ビルケナウ博物館
訪問見学
聖ユゼフ平和教会にて「鎮魂」奉納公演(部分)

4日(金)　グロトフスキ・インスティトゥートの招聘により欧州文化
首都ブロツワフで開催される国際演劇祭シアター・オリン
ピックスに参加
新作能「鎮魂」、能「清経」上演(JASE劇場)

5日(土)　グロトフスキ・インスティトゥートのスタジオ・ナ・グロブリにて
レクチャー・デモンストレーション、仕舞「楊貴妃」「野守」
新作能「鎮魂」、能「清経」上演(JASE劇場)

6日(日)　ブロツワフ発

7日(月)　日本着

14日(月)　国立能楽堂公演

主催：公益社団法人 銕仙会
協賛：日本精工株式会社
公益財団法人 昭和池田記念財団
株式会社ブリヂストン
協力：LOTポーランド航空
語学協力：関口時正

新作能「鎮魂」（2016年11月14日、国立能楽堂）プログラム

聖ユゼフ平和教会祭壇画

国際演劇祭シアター・オリンピックスにて

©銕仙会 のご許可を得て公開しています。北海道ポーランド文化協会